

## 韓国の地域、在宅ケアと日本との比較

家族・地域支援学科 山路 憲夫

2009年に始まった韓国老人長期療養保険（日本の介護保険制度にあたる）について、2009年に引き続いて、韓国保健家族福祉部（日本の厚生労働省にあたる）ヒアリング＝医療制度、病院と診療所を中心とした地域医療、地域ケアの現地調査等を実施する予定だったが、日本での地域包括ケア体制構築（2012年度からスタート）という実践的課題研究の必要から、山路らが在宅ケアの多職種連携を目指して設立したNPO福祉フォーラムジャパン（2009年11月東京都から正式に認証）の活動の一つとして特別養護老人ホームを廃

止したデンマークネズドヴェズ市に調査・研究を実施（メンバー24人、山路は団長として参加）、さらに2010年8月、家庭医導入を柱としたドイツの医療制度改革の現状と課題について、ドイツ調査も実施したため、2010年度の韓国調査を見送らざるを得なかった。

以上の事情があったとはいえ、研究助成を活用できなかったことをおわびしたい。韓国老人長期療養保険のその後の展開についてはさらにフォローしていく。

## 縦断的インタビュー調査による児童期の自己概念の発達

発達臨床学科 佐久間 路子

### 【目的】

幼児期以降の自己概念の発達については、これまでにDamon & Hart（1988）による自己理解モデルやHarter（1999）による認知社会的構成概念としての自己の発達モデルが示されている。また佐久間（2006）は、幼児期・児童期を対象にしたインタビューおよび青年期を対象とした質問紙調査によって、幼児期から青年期にかけての自己概念の発達モデルを実証的に示している。このような発達の变化を明らかにするためには、縦断研究が不可欠であるが、これらの研究のほとんどは、横断的な調査に基づいているのが現状である。そして、これまで縦断調査に基づく個人内の変化は解明されていない。また自己概念の研究において、自分が成長していくことを子ども自身がどのように認識しているのかを明らかにした研究はほとんどない。子どもは自己の発達（成長）を

どのように捉え、それをどのように自己の成長への期待につなげていくのかを検討することは、児童期の自己理解の発達に新たな観点を提示するものといえる。

佐久間は、科研費若手研究（B）の補助をうけ、2005年度～2009年度までの5年間で、幼稚園5歳児から小学校6年生までを対象に、幼児期・児童期における自己概念の発達を研究課題として、縦断追跡的に、自己の成長（過去から現在、現在から未来への変化）の認識を含む自己理解インタビューを行ってきた。そのうち前半の3年間の研究結果として、幼児期および小学校低学年の自己の成長の認識について肯定的に捉えていること、さらに対象者が小学校中学年に入り、自己の成長（未来への変化）を必ずしも肯定的に捉えていないことを明らかにしている（佐久間、2008）。

2010年度に行った本研究では、これまで5年

間行ってきた縦断調査に引き続き取り組んだ。具体的には調査の対象者のうち、小学校5年生（幼稚園5歳児から追跡の6年目）と6年生（小学校1年生から追跡の6年目）の児童を対象に、同様の自己理解インタビューを行った。この縦断調査は、2011年度を最終年として、小学校6年生（幼稚園5歳児から追跡の7年目）を対象とした調査を行うことで、小学校6年間の縦断調査結果が約100名分集まることとなる。詳細な分析は、2011年度以降に行う予定であるが、本年度の結果の一部を以下に簡単に報告する。

### 【方法】

1. 対象児：公立小学校5年生26名、6年生25名。
2. 実施時期：2010年8月
3. 実施方法

小学校の授業時間に、小学校の教室でインタビューを行った。1校以内に調査を終了させるため、インタビューはアルバイトを含む6名で行った。インタビュー時間は約10分であった。インタビューはすべて録音し、逐語記録として起こした。

調査実施前には、保護者に調査の意義と内容について知らせる手紙を配布した。また対象児に対しては、調査開始時に、質問は正解がある問題ではないこと、回答に対して調査者が評価をすることはないこと、成績にも一切関係ないこと、調査は回答を強制するものではないこと、個人が特定されるような情報を公表することはないことを伝えた。

### 4. インタビュー項目

- (1)現在の自分について（好きなところ、いいところ、

ろ、どういう子になりたい）

- (2)1学年前の自分（どんな子だったか、どんなところが変化したか等）
- (3)1学年後の自分（どんな子になっているか、どんなところが変化するか等）

各質問の回答に対し、なぜそう思ったのか、理由をたずねる質問をした。

### 【結果と考察】

上記の質問項目のうち「自分のいいところ」に関する回答について、以下に結果を報告する。2009年度および2010年度の調査における子どもの描出を、佐久間（2006）の分類枠を参考に表1のように分類した。描出数があまり多くないため、今回は統計的分析を行っていない。描出頻度の傾向としては、4年生では具体的な能力に関する描出が多く見られた。5年生では、勤勉の態度・性格が、6年生では協調的態度・性格に関する描出がやや多く見られた。ただし5年生と6年生では、「ない」「わからない」という回答をあわせると、全体の3割を超えており、他の描出に比べて最も多かった。高学年になると、自分のいいところという肯定的な側面に関して、具体的な描出をしないようになることが明らかになり、自己をあまり肯定的に捉えなくなることが示唆された。今後は他の質問項目に関する分析もあわせて、横断的あるいは縦断的な発達の変化を検討するとともに、来年度の調査終了後に、6年間の記録をまとめて個人ごとに整理し、個人内の発達の変化について検討する予定である。

表1 自分のいいところ

	4年生(2009)%		5年生(2010)%		5年生(2009)%		6年生(2010)%	
身体的特徴	1	4.0	2	7.7	2	8.7	0	0.0
具体的な能力（勉強ができる、足が速いなど）	13	52.0	3	11.5	4	17.4	3	12.0
協調的態度・性格（友達と仲良く、やさしいなど）	4	16.0	4	15.4	4	17.4	6	24.0
勤勉的態度・性格（あきらめないなど）	4	16.0	5	19.2	6	26.1	3	12.0
外向的態度・性格（元気、おもしろいなど）	2	8.0	1	3.8	1	4.3	3	12.0
その他具体的な行動	0	0.0	1	3.8	0	0.0	2	8.0
ない	1	4.0	2	7.7	7	30.4	4	16.0
わからない	4	16.0	8	30.8	2	8.7	4	16.0
合計（対象人数）	25	100.0	26	100.0	23	100.0	25	100.0

## 引用文献

Damon, W., & Hart, D. 1988 Self-understanding in childhood and adolescence. Cambridge: Cambridge University Press

Harter, S. 1999 The construction of the self: A developmental perspective. New York: Guilford Press.

佐久間路子 2006 幼児期から青年期にかけての關係的自己の発達 風間書房

佐久間路子 2008 児童期における自己の成長に関する認識～縦断的インタビュー調査による検討～ 日本発達心理学会第19回大会発表論文集 P767

## 「音楽理論の視点から分析する子どもの歌曲の特徴」 ～日本における歌唱教材の特徴と東西比較の研究～

子ども学科 秋山 治子

### 1. 研究の目的

「歌う」という大枠で括った幼児の歌唱行動を細分化してみると、様々な切り口が見える。それらは例えば聴覚機能の側面、音群知覚・時間的及び空間的記憶・想像表象の保持・再現・表現等の側面、発声機能面、音感的発達の側面・その他音楽美の精神的受容の側面等にまで言及することができよう。このように歌唱成立までの過程や側面が含まれる子どもの歌唱行動は、保育・教育の場において取り上げられる歌唱教材によってその発達を促され、左右されても不思議ではないと考える。

研究の主たる目的と研究方法は、子どもが現在および将来、より幸せに育つための歌唱教材の追及を視座に据えつつ、①歌唱教材の現在の状況を調べて第一次資料を作成し、②私立幼稚園、私立保育園、公立保育園ではどのような歌唱教材を展開しているかに関する整理と分類を行い、それをもとにした③楽曲構造と内容分析を行い、④そこから見えてくる課題や問題点を示し、⑤考察することである。⑤においては、保育・教育音楽活動の在り方についてもできれば考察を深めたいと考えている。企画当初には、日本の幼児曲と関係深いアメリカの歌唱曲を比較研究する予定を立てて

いたが、これについては本研究の5つの課題を終了させてから手掛けることにしたい。

### 2. これまでの研究経過

2010年6月から研究を開始した。東京都全域を対象地域として、公立保育園300件・私立保育園300件・私立幼稚園300件、合計900園にアンケート質問紙を郵送した。一つの園に対しては同形式・同質問内容で、「3歳クラス」「4歳クラス」「5歳クラス」に分けて各担当者が記載できる形にして合計3枚の質問紙と挨拶文を同封した。アンケート用紙の作成にはかなりの時間をかけて推敲を重ねた結果、8月初旬に完成させることができたが、郵便局等の手続き完了後、送付開始ができたのは9月であった。12月と翌年1月に回答の返信を受け取るまでの期間は、楽曲分析のための音楽理論書の研究に取り組んだ。楽曲アナリーゼに関する文献研究を行ったが、これをもとに、これからアナリーゼ（楽曲分析）を開始する予定である。

### 今後の研究計画

これまで、第2項に示した5つの研究項目のうち、①をほぼ完了したという時点にとどまって